

07 菅生川 (中国道～菅生ダム)

保全

蛇行区間であり、良好な瀬・淵が形成され、溪流辺の植生が生育する。



課題

ダムの低層放流によって夏期最低水温が異常に低い。横断工作物により川の営力が減衰しており、ツルヨシ群集が河道一面に優占している区間もある。菅生ダム直下では底生動物の種数が前後と比較して極端に減少する。

08 明神川

課題

水田地帯を流れる小支川である。下流域で横断工作物により形成された湛水域が連続する。



06 護持川

課題

横断工作物の密度が最も高い支川である。



03 夢前川下流部 (~菅生川合流点付近)

課題

高水敷が公園として占用されている。低水護岸の連続も相まって、植生は外来種密度が高く、水際のエコトーン*1が劣化している。横断工作物が連続し、湛水域が形成されている。水質は汚濁傾向で夏期最高水温も高い。魚類・底生動物の外来種が多く、通し回遊性*2の種は遡上してきているが、夢前大橋下流の横断工作物など遡上阻害が疑われる。夏季には減水が著しく瀬切れの見える区間もある。



01 夢前川河口

保全

潮止め堰堤がなく、汽水域が形成され、ヨシ原の見える干潟が残っている。汽水域・干潟だけに生育・生息する特定種が多く見られる。



課題

1955年頃まではシロウオが遡上し、アサリなどが多産する自然豊かな河口であった。その後、埋立や水質汚濁により劣化した。

11 夢前川・菅生川 (上流部)

保全

夏期最高水温が26℃以下の冷水区間である。魚類と底生動物の冷水性種が多く生息する。とくに夢前川は底生動物の在来種も多く良好な上流域が残っていると言える。水辺には流辺の植物が生育する。



10 夢前川 (前之庄～木戸ダム)

課題

河床低下が著しく、岩盤が露出する区間が連続する。砂防堰堤などによる上流からの土砂供給の減少が原因だと考えられる。



09 夢前川 (夢前町役場付近)

課題

高水敷の公園整備にとまじり、河床が平坦化している。ツルヨシ群集が河道一面に優占し、底生動物の種数が前後と比較して極端に少ない。



05 坪川

保全

水田地帯を流れる小支川で、護岸率が高く、水面比高の高い横断工作物も点在する。しかし、淵や湛水域を中心に特定種が多く生息する。これらの種は流入する菅生川では少なく、夢前川水系において重要な支川である。



04 菅生川・夢前川中流部

保全

人為的な要因もあるが、水系内でも後背水域が多い緩流域である。良好な水際エコトーン*1が見られる。魚類の在来種の種数が多い。



課題

河床勾配が1/400～1/200の緩流域に横断工作物が点在することで、止水域的な環境にある。攪乱の減少により、菅生川でヤナギ林が高木化し、夢前川で浮石率が低く底生動物のグレイザー*3が少ない。特定外来生物であるミズヒマワリが確認されるなど、水中～水際で外来種の侵入が顕著である。水質汚濁傾向にある。

02 大井川・水尾川

保全

水質が汚濁傾向にある。夏期最高水温も31℃前後で高い。底生動物は汚濁指標種の割合が高く、魚類・底生動物ともに外来種が多い。護岸率が高く、植生は貧弱で、富栄養な立地を好む種が優占する傾向にある。



課題

下流に潮止めの水門があるが、通し回遊性*2の種や汽水魚が上流地点まで遡上してきている。

全体区分

○ 各調査結果を総合的に判断・整理したゾーニング

魚類・底生動物の現地調査地点

● 調査地点

回遊種の確認上限

▼ 近年の確認上限

▼ 過去の確認上限

植生から見た流程区分

— ツルヨシ・ネコヤナギ型

— 移行帯

— オギー・ツルヨシ型

— 感潮域

横断工作物の確認位置 (水面比高0.2m以上)

○ 魚道あり

○ 魚道なし

間取調査による名前のある淵の現状

● 無くなった

● 浅くなった / 狭くなった

● 変わらない

● 不明

予察調査による河川環境の記録

● 課題が見つかった箇所

*1 「エコトーン」…陸域と水域の境界となる水際のように異なる環境が連続している場所 (=移行帯)
*2 「通し回遊性」…海と川を往復する生活史を送る性質
*3 「グレイザー」…藻類を剥いで食べる底生動物の種類